vol.3

選書者：早瀬直久

（シンガーソングライター、クリエイター）

●『えーえんとくちから』著者：笹井宏之

詩、詠、歌、どれも同じ「うた」。その心を改めて気付かせてくれたのは、26歳という若さでこの世を去った歌人 笹井宏之さんの短歌だった。暮らしの中の些細な時間の切り取り方が水のように透明で、未来への希望を見つめ続けられるヒントを与えてくれる。言葉が持つ奥行きの中で、どう寄り道をして、どう歩くのか、本を開く度に印象が変わる季節のような、物語的一冊。タイトルも秀逸で、収録されている一節から付けられているのだが、全体を通してみるとより深く胸にくる言葉遊び。ぜひ、声に出して読むことをおすすめしたい。

●『コンビニに生まれかわってしまっても』著者：西村曜

言葉のリズムの好さは、短歌には欠かせない。そのリズムが変拍子であればまた、声にすることで生まれる余白のビートが心地よく、それこそ、こちらを拍子抜けさせてくれ、思わず口がゆるむもの。これはまあ、そっくりそのまま“生活”に置き換えることもできるよなぁ、と徹夜明けの指で80ページくらいを押さえながら思ったのを覚えている（UFOを探しながら）。これってとっても今だよね、と声で刻んでしまいたくなるほど今を漂う言葉への音の乗せ方がどれも面白く、切ない描写にも独特の視点で光がさしてある。SNS時代なんて言葉の枠に火をつけて、暗い空にきれいな花火を見せてくれる一冊。

●『四角形の歴史』著者：赤瀬川原平

あらゆる四角いデバイスで“見る”という行為に溢れる現代、昔話のような視点で紐解きながら展開されていく哲学絵本。わたしも一度でいいから犬の目になって景色を見てみたい。その時、目的になるものはなんだろう、そんなことをボンヤリと考える時間が好きな理由が分かった気がします。物事を俯瞰で見ることや、何かが大きいものの影になってはいないか、深読みするとそういった生きる上での考え方みたいなものが散りばめられていて、角張った思考を柔らかくしてくれる一冊。どうしても依存しやすい四角形、自然界には元々なかったものなのに、いつの間にか枠一杯の広告のように溢れかえっていますよね。情報を詰め込むのに便利な四角形の話を、旅路の車窓を眺めながら家族で語らってほしい。

●『大地の五億年』著者：藤井一至

ほどほどに自然に恵まれた兵庫県川西市で育ったが、土のことをまるで何も知らなかった。地球に土が誕生して５億年、ひれ伏すほどの壮大な土の物語、その深さを掘るように読み耽った。何がすごいって、スコップ片手に掘り当てるしかない膨大な調査の集積が、凄まじい時間スケールでまとめられていて驚くばかり。ゆえに内容としてマニアックな箇所も少なくないが、土を通して見えてくる世界の方が逆に分かりやすく感じることさえあった。今このまま進めば果てないはずの土物語を終わらせかねない我々人類、ダーウィンと宮沢賢治が交差した点に星をつけて、あらゆる相互作用への理解を深めていきたい。土と生きる人のこれから、読み物としても楽しく、とにかく粘度ある一冊。

●『腸と森の「土」を育てる』著者：桐村里紗

いい年齢になってくると会食の席などでしばしば繰り広げられる健康の話題。やれココが痛いだの数値が高くなってきただの自分の話をするわけです。一方でコロナ禍を経験し、自分だけの力で健康を保つのに限界を感じた人も多いでしょう。内科医でもある著者の桐村里紗さんが書く「プラネタリーヘルス（人と地球を切り分けず、多様な生物が生かし合う自然環境を維持し、この惑星全体の健康を実現すること）」に合点がいくことが多かった。部分だけでなく全体に目を向けた“健康”への実践方法としてもたくさん学べるが、まずはこれからの未来の子供たちに向けて、食育と環境教育が対であることを大きな視点で知っていてほしいと思わせてくれる一冊。わたしも実践して長いフレキシタリアンな生活と共におすすめしたい。かれこれ 30 年も持病と共生している食道楽のわたしが言うのだから間違いない。